

令和2年度 学校評価報告書（実施結果）

	視点	4年間の目標 (令和2年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (学校評価アンケート・ 学校評価部会)	総合評価（3月31日実施）	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1	教育課程 学習指導	○自立と社会参加に向けた一貫性のある教育課程を編成し、学習指導を行う。	①卒業後の生活を具体的にイメージする中で、生活年齢に応じた学習内容を精選し、提供すると共に、授業時間ごとに具体的な目標を設定し児童生徒にわかる形で評価を伝える。 ②新学習指導要領をもとに、連続性のある教育課程編成を目指す。	①年間計画の中にお互いの授業を見合う機会を数多く設定し、学習内容の精選、授業の目標設定と評価が適切に行われているかを確認し合い、個々の授業力向上につなげる。 ②校内研究を通して新学習指導要領に対する理解を深め、より実態に合った教育課程の改編につなげる。	①生活年齢に応じた授業を実践し、授業の目標に対する「子どもにわかりやすい評価」をすることができたか。 ②新学習指導要領のポイントを教員間で共有できたか。	①授業の目標をホワイトボードに明示し、授業前に確認することで、授業後の「評価」をわかりやすく行えるようになってきた。研究授業の指導案や参考文献等を教員同士で共有できる仕組みを作った。 ②新学習指導要領の学習会や研修会で理解を深め、「生活科」における系統性のあるキャリア教育について考察することができた。	①全教室のホワイトボード化が終了したので、「学習のねらい」の示し方や、授業後の「評価」方法について、学部研究を通して検討していく必要がある。 ②ライフキャリア教育の視点をより強く意識し、実際の指導支援の場面で活用し、教務班を中心に実態に合った教育課程の編成につなげる。	○保護者アンケートでは、88%の保護者が「生活年齢に応じた授業を実践し、授業の目標に対する『子どもにわかりやすい評価』をすることができた」と回答している。 ○保護者アンケートでは、約90%の保護者が「自分で選択し意思表示することについて、生活年齢に応じた取り組みを行うことができたと思う」と回答している。	①生活年齢に応じた学習内容を精選し、提供すると共に、授業時間ごとに具体的な目標を設定し児童生徒にわかる形で評価を伝える取り組みが、学校全体で進んだ。授業の目標を明示し、授業前に確認することで、授業後の「評価」をわかりやすく行えるようになってきた。お互いの授業を見合う機会を数多く設定することについては、十分ではなかった。 ②新学習指導要領をもとに、連続性のある教育課程編成を目指したが、具体的な教育課程の改編につなげることはできなかった。	①研究成果を活かし、教員一人ひとりが一層人権感覚を磨き、人権に配慮し、尊重する指導・支援を行っていく必要がある。キャリアアップ班が中心となって、年間計画の中にお互いの授業を見合う機会を数多く設定し、評価し合う中で、個々の授業力の向上につなげる。 ②定着しつつあるフロントゼロをはじめとする学習環境の整備を更にすすめると共に、校内研究を通して新学習指導要領に対する理解を深め、総括連絡会や教務班会等で横断的な議論を重ね、より実態に合った教育課程の改編につなげていく。
2	児童生徒指導・ 支援	○個々の障害特性を理解し、生活年齢や発達段階に合った指導・支援を行う。	①適切な実態把握のもと、児童生徒の「わかった・できた」体験を十分に保障するよう、支援方法や環境設定の工夫をする。	①外部講師や専門職の助言を受け「わかる授業」を実現するための手立てを増やすと共に、定着しつつあるフロントゼロをはじめとする学習環境の整備をすすめる。	①適切な実態把握のもと、児童生徒の「わかった・できた」体験を十分に保障するための支援方法や環境設定の工夫することができたか。	①今年度は、外部講師からの助言指導を得る機会がなかなか難しい状況であったが、専門職が児童生徒のアセスメントに積極的に関わり、より精度の高い実態把握ができ授業改善につなげることができた。 刺激の少ない環境設定をすることにより、児童生徒に達成感や自己肯定感を獲得させることができた。	①学校全体の授業力の向上や授業改善を進めることが今後の課題である。専門職からの助言を受け、教員自らがアセスメントを指示する力が身につけることが必要である。 研究推進班を中心に、児童生徒の「わかった・できた」を更に引き出すために、支援方法や環境設定についての研究・研修を継続的に行っていく必要がある。	○保護者アンケートでは、約88%の保護者が「適切な実態把握のもとに児童生徒の『わかった・できた』体験を保障するための支援方法や環境設定を工夫することができた」と回答している。 ○学校運営協議会委員からは、「『わかった・できた』を数多く引き出す実践がフロントゼロに象徴される整えられた環境の中で行われていた」との評価をいただいた。	①適切な実態把握のもと、児童生徒の「わかった・できた」体験を十分に保障するよう、支援方法や環境設定の工夫をすることについては、十分ではないが達成できた。学校全体としての機運も高まっている。 刺激の少ない環境設定をすることにより、児童生徒から多くの「わかった・できた」を引き出し、達成感や自己肯定感を獲得させることができた。 今後、学校全体で、アセスメントに関する研究を行うとともに、研修の機会を数多く確保し、職員に浸透した、子どもたちの「わかった・できた」を実現する取り組みをいかに継続していくかが課題である。	①「わかる授業」を実践するための手立てを増やし、学校全体で共有し取り組んでいく。そのために引き続き、外部講師や専門職の助言を受けられるよう研修計画を立案する必要がある。 刺激の少ない環境設定については、物理的な環境だけではなく、教員の発する音声刺激にも注意をする必要があることを各学部、分教室で確認し徹底していく。
3	進路指導・支援	○卒業後の生活をイメージし、小学部段階から系統性のある進路指導・支援を行う。	①好きなこと・得意なことを見つけ、安心して一人で過ごせるようにする。 ②自分で選択	①教務班と各学部が中心となり小学部段階から個々の児童生徒の実態に合った余暇の過ごし方について指導支援する方策を検討し実践する。 ②「藤養の人権	①家庭とも連携し、休憩時間や余暇を安心して一人で過ごす方法を見つけることができたか。 ②自分で選択し	①個々の実態に応じた余暇の過ごし方について、様々な授業場面で実践していたが、指導支援の内容を系統立てて整理するまでには至らなかった。 ②「藤養の人権3	①児童生徒の将来の生活をイメージし、小学部から高等部卒業までを見据えた、系統的な学習内容の精選とそれに基づく指導・支援が必要となる。 ②2年間の人権教	○保護者アンケートでは、「家庭で過ごす時間が増える中、家庭と連携し、休憩時間や余暇を安心して過ごす方法を見つける手助けができた」という設問に対する、「思う・やや思う」との回答が65%にとどまった。 ○学校運営協議会委員か	①好きなこと・得意なことを見つけ、安心して一人で過ごせるという目標については、達成できなかった。次年度も、目標に掲げ、具体的な方策を検討していく必要がある。 ②自分で選択し、意思を表出す	①コロナの影響もあり、引き続き、家庭で過ごす時間が長くなると考えられるので、「わかった・できた」につながる好きなこと・得意なことを、授業や休憩時間の中で見つけ、一人で過ごせる時間を伸ばすことにつなげる。 ②次年度以降も、ライフキャリ

	視点	4年間の目標 (令和2年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (学校評価アンケート・ 学校評価部会)	総合評価(3月31日実施)	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
			し、意思を表出することを小学部から積み重ね、1対1から集団の中でというように生活年齢に応じた取り組みを行う。	3段階」をもとに一人から仲間とともに活動することや、自立と社会参加に向けた系統性のある指導支援方法を検討し実践する。	意思を表出することを小学部から積み重ね、生活年齢に応じた取り組みを行うことができたか。	段階」を常に意識し、各学部で取り組むべき課題を学校全体としてとらえ、系統性のある指導・支援を行うことができた。	育研究の成果物である「藤養の人権3段階」を学校の財産として有効活用をしていく必要がある。	らは、「余暇の過ごし方についての具体的な目標・手立てを明確に示し、次年度しっかりと取り組んでほしい。」とのご意見をいただいた。	ることを小学部から積み重ね、1対1から集団の中でというように生活年齢に応じた取り組みを行った。「藤養の人権3段階」をもとに、「仲間とともに」を意識し、将来の自立と社会参加を見据え、系統的な指導を行うことができた。	ア教育の視点から小学部から高等部卒業までを見据えた系統的な学習内容について、各学部が主体となり学部研究や教科会を活用しながら、実際の指導・支援に反映させる。
4	地域等との協働	○共生社会の実現に向け、地域資源の活用、本校の資源の活用等を通し、双方に有益な取り組みを行う。	①地域とともにある学校としてできることをコミュニティ・スクールの中で模索し、地域住民が訪れたい学校になるよう、イベント開催や情報発信の工夫をし、成果を挙げる。 ②インクルーシブ教育実践推進校の湘南台高校との連携の方法を模索する。両者にとって価値のある連携を目指す。	①コミュニティ・スクールの「切れ目ない支援部会」において、地域とともに作るパラスポーツイベントの企画・運営をするとともに、ホームページ等を活用した迅速な情報発信に努める。 ②双方の担当者が定期的に話し合う機会を持ち、具体的な連携方法を検討する。	①コミュニティ・スクールを活用し、地域住民が訪れたい学校になるようなイベント開催や情報発信をできたか。 ②湘南台高校が必要としている情報を提供することができたか。	①学校生活の様子や事務連絡等を迅速に学校ホームページから発信した。また、学習保障のための「学びの部屋」を公開した。校内行事は軒並み延期又は中止となったが、ホームページで日常の取り組みを中心に発信した。 ②年度当初に、湘南台高校の担当者と情報交換をし、本校の教育相談担当が、巡回相談を行った。	①今年度実施できなかった「切れ目ない支援部会」主催のパラスポーツイベントを来年度は実施し、障害者理解、啓発に努める。 ○学校運営協議会委員からは、「コロナだけでなく、今後もありうるだろう長期の休業に備え、『学びの部屋』の充実、zoom会議などの活用など、平時のうちに対策を練っておくことは危機管理上大切な目標になってくる」とのご意見をいただいた。	○保護者アンケートでは、約79%の保護者が「臨時休校期間を含め、学校は必要な情報を提供できていると思う」と回答している。 ○学校運営協議会委員からは、「コロナだけでなく、今後もありうるだろう長期の休業に備え、『学びの部屋』の充実、zoom会議などの活用など、平時のうちに対策を練っておくことは危機管理上大切な目標になってくる」とのご意見をいただいた。	①コロナの影響で、地域支援行事やボランティア受け入れの中止など、例年通りの活動はできなかったが、感染防止対策を実施しながら、パラスポーツ教室を1回実施できた。いかに、多くの人に興味を持って閲覧してもらえる内容の充実したホームページを作っているかが課題である。 ②インクルーシブ教育実践推進校の湘南台高校との連携の方法を模索したが、コロナの影響で、十分な取り組みには至らなかった。持続可能な連携や交流のシステムを作ることが課題である。	①次年度は、学校運営協議会の切れ目ない支援部会主催のパラスポーツイベントの企画・運営を行い、障害の有無を問わず自然に触れ合う経験を通し、本校への理解や障害者理解啓発につなげていく。 ②本校の相談担当と湘南台高校の教育相談コーディネーター、進路担当、生徒指導担当等が定期的に話し合う機会を設け、持続可能な連携システムを構築する。
5	学校管理 学校運営	○安全・安心な、事故・不祥事のない学校であるよう管理・運営を行う。	①基本的な書類管理・個人情報の管理について徹底する。 ②自分の生命を守る子どもを育てると共に、組織として子どもを守る判断ができるよう訓練する。	①事故防止会議等でチェックリストを活用し理解啓発を図ると共に、組織としての管理システムの見直しを行う。 ②時間・場所・状況に変化を持たせたシェイクアウト訓練や避難訓練を、計画的に実施する。	①基本的な書類管理・個人情報の管理を徹底し事故・不祥事をゼロにすることができたか。 ②児童生徒に対し、危機意識や対応能力を身に付けさせると共に、職員の判断力を高めることができたか。	①個人情報の管理や私費会計業務において、大きな事故は未然に防ぐことができたが、システムの変更や改良が必要なケースがあった。 ②今年度は、密になることを避けることを優先し、避難訓練を実施することを見合せた。一方でシェイクアウト訓練については継続して実施し、児童生徒が、混乱することなく進んで実施できるようになってきた。	①必要に応じて、管理システムを変更し、職員全体で共通理解をしようとして事故を未然に防止する。 ②引き続き、時間・場所・状況に変化を持たせた、防災訓練や防犯訓練を実施することで、個々に考えて行動する力を身につけていくことが必要である。	○保護者アンケートからは、91%の保護者が「個人情報の管理を徹底し、安全安心で事故・不祥事のない学校の管理・運営を行っていたと思う」と回答している。 ○学校運営協議会委員からは、「私費会計業務については、ミスが起こらないよう学校全体で事故防止の取り組みの徹底をしてほしい。」とのご意見をいただいた。また、「防災倉庫内の備蓄食料については、点検方法の改善などの具体的な取り組みを示してほしい。」とのご意見をいただいた。	①基本的な書類管理・個人情報の管理について徹底するという目標は概ね達成できた。引き続き事故防止会議や教職員の綱紀保持の通知や啓発資料等を活用し、事故・不祥事の未然防止に努める必要がある。 ②コロナの影響もあり、自分の生命を守る子どもを育てると共に、組織として子どもを守る判断ができるよう訓練するという目標に向けた取り組みは十分できなかった。感染防止対策を徹底しこれまでの取り組みを進めるとともに、ICT機器を活用する等、「新しい訓練の方法」を検討していく必要がある。	①引き続き、個人の意識を高め、当事者意識を持ち続け、同僚性を発揮しながら不祥事ゼロを実現する。「不祥事に対するハードルを下げない組織」を目指し、必要に応じた管理システムの見直しを行っていく。 ②次年度以降も、児童生徒一人ひとりが主体的に考え、様々なシチュエーションに対応できるようになることを目指し、危機意識や対応能力を身に付けさせるための訓練を行っていく。防災宿泊訓練については、目的を明確にし、コロナ対策を万全にして実施する方向で検討する。